ナフサの思い出

大森　海太

最近、支持率低下に功をあせった某大国の大統領が、某小国の首相にそそのかされて中東の産油国を襲撃した。

圧倒的な力の差で早期に決着すると思われたが産油国側もしたたかで、石油タンカーの通る海峡を封鎖したり別の大国を味方につけたり、先が見えてこない。

おかげで世界中の石油が逼迫するなど、はた迷惑な話だ。

それはともかく今までほとんど話題にも上らなかった「ナフサ」が突然新聞やテレビで報じられているのには驚いた。

ナフサとは原油を蒸留するとＬＰＧの次に出てくる留分で(続いてガソリン、灯油、軽油、最後に重油)、軽質で自動車燃料には適さず、石油化学の原料に用いられる。

私は現役時代ナフサの購買を担当していたことがあり、半分はコンビナートの石油会社から、不足分は海外から輸入品を調達していた。

そんなわけで中東には何度か出張したが、仕事にかこつけてアチコチ見聞を広めるチャンスに恵まれた。

サウジアラビアの紅海に面した街ジェッダ、聖地メッカへの入り口だ。内陸の首都リヤド近郊では赤い砂漠の砂をビンに詰めてお土産にした。

ペルシャ湾側ではダハラン、ジュベイルなどの石油基地。その北はクウェイト。

南にはバーレーン。ここだけは酒が飲めるので、週末にはサウジの貴族たちが泊りに来て、べろんべろんになって帰るのだとか。

ＵＡＥのアブダビからドバイへ。ドバイは中東の香港といわれ賑っており、砂漠に芝生を植えたゴルフ場で遊んだ。

アラビア海に面したオマーン。首都マスカットの宮殿やルスタック・ナハルでの緑濃きオアシスを思い出す。

今も記憶が鮮明なのはイラン、一九七九年の革命後でも平和な時代だった。

テヘランでシルクの絨毯を買い、かつて世界の半分といわれた古都イスファハンの王の広場で、夕陽に輝く金曜モスクに目をうばわれた。

このように思い出深いナフサ。昨今はその逼迫により生活物資の不足が懸念されているが、当時はそんな心配もなく、またと出会えぬ貴重な体験だった。